

第99回日本細菌学会関東支部総会は、平成28年10月6日（木）、7日（金）の2日間にわたり、北里大学薬学部コンベンションホールにて開催され、無事終了いたしました。

今回の支部総会では、一般演題のほか、特別講演、特別シンポジウム及び若手研究者ワークショップを企画いたしました。

特別講演は、阿部章夫先生（北里大学感染制御科学府）に「百日咳菌のエフェクターを介した感染戦略」として、日本における百日咳の流行と現行ワクチンの問題点などを含め、百日咳菌のエフェクター機能の解析を基盤とした百日咳菌の感染戦略について、丁寧にわかりやすく講演していただきました（写真）。

特別シンポジウムにおいては、「細菌学の新たな潮流」をテーマに、垣内力先生（東京大学大学院薬学系研究科）からは「昆虫モデルを用いて解明する細菌の病原性発動システム」、野村暢彦先生（筑波大学大学院生命環境科学研究科）からは「バイオフィルムと細胞死 ～One for All, All for One?～」、辻典子先生（国立研究開発法人産業技術総合研究所）からは「乳酸菌による腸内環境と免疫応答制御」、今泉温子先生（国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構）からは「共生菌の植物根への巧みなアプローチ～カルシウムシグナリングを介した感染経路構築のメカニズム」及び三木剛志先生（北里大学薬学部）からは「抗菌レクチンによる細菌性腸炎の制御機構」についての講演が行われ、細菌-宿主間、細菌-細菌間における複雑な相互作用について講演いただき、すばらしい研究成果に魅了されました。

若手研究者ワークショップにおいては、細菌に関わる多彩な研究領域から最先端の研究を行っている若手研究者の皆さんに講演をお願いしました。渡邊真弥先生（自治医科大学医学部）から「A群レンサ球菌の侵襲性感染症発症時におけるゲノムの変化と遺伝子発現機構」、岡崎真先生（東京農工大学農学府）から「マメ科植物と共生を司る根粒菌のⅢ型分泌系」、鈴木志穂先生（東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科）から「細菌感染におけるインフラマソームの活性化」、松井真里先生（国立感染症研究所）から「アシネトバクター属の分子疫学と薬剤耐性」及び西山啓太先生（北里大学薬学部）から「ビフィズス菌の糖質分解酵素を介した宿主定着機構」というタイトルで講演いただき、活発な討論を通してそれぞれの研究内容について理解を深めることができました。

一般演題15題からは、大学院生発表者を対象とした若手奨励賞に、高草木謙介さん（東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科）、幸地悠人さん（東京大学大学院薬学系研究科）、後藤亮介さん（北里大学大学院薬学研究科）が選ばれました（写真：左から幸地さん、後藤さん、大会長）。

本大会の開催にあたっては、日本細菌学会関東支部 支部長 奥野ルミ先生をはじめ、いろいろな方にお世話になりました。座長を務めていただいた先生方にも改めて御礼申し上げます。最後に、演題発表いただいた先生方や参加者の皆さんには、活発な討論で大会を盛り上げていただき、深く感謝申し上げます。

